

## 書評：三浦利章著「行動と視覚的注意」

千葉大学工学部 塩入 諭

本書はタイトルの通り行動と注意の問題についての本であり、特に自動車の運転時の視覚処理と注意の係りについての著者が行ってきた研究をまとめたものである。したがってこの分野の研究を網羅することが目的の本ではない。しかし、先行研究についての記述も多く自動車の運転時の視覚処理や注意の在り方に興味がある読者にとっては、「使える本」の一冊といえるであろう。昨今取りざたされる運転時の携帯電話による交通事故などの社会問題を考える上でもタイムリーな本といえる。ただし、ナビゲーションシステムの影響についての話はでてくるが、携帯電話については触れられていない。

本書は3部構成で、それぞれ導入、行動状況と視覚的注意、視覚的注意の遠近移動特性と見出しがつけられている。第1部には注意、眼球運動、有効視野などについて、特に運転時など大きな負荷のかかっている場合における視覚処理との係りがまとめられていて、本書で紹介される実験を含めこの分野での研究を理解するための予備知識として有効である。第2部には、自動車および二輪車を運転中の眼球運動の測定とそれぞれの運転中に呈示される光刺激の検出能力の測定実験について詳しく説明されている。いずれの実験も実際の行動時の視覚処理過程を知るための貴重なデータである。このような研究は、実際の行動時での人間の情報処理能力を実験室の中での研究から予測することはできないとの著者の認識に動機づけられていて、本書はこの種のフィールドワークの重要性を啓蒙する書であるともいえる。フィールドワークであるが

ための限界も当然存在するわけであるが（例えば刺激の制御の不完全性）、それを差し引いてもここに示される実験結果は多くの示唆に富み、運転時に限らず負荷の高い作業をしているときの視覚処理を考える上で参考となるものである。第3部には注意の奥行き方向の移動についての研究結果が述べられている。著者が述べる通り、注意の奥行き方向の移動についての研究はほとんどない。そして、自動車の運転時などを考えると注意の奥行き方向の移動について知ることは非常に重要なことといえる。この2点のみからもここでのデータの重要性は十分理解できるであろう。特に興味深い点は、注意の移動の前後方向での移動の非対称性についてである。注意の移動にかかる（と考えられる）時間は「手前から遠くへ」の方が、「遠くから手前へ」よりもずっと長いという実験結果が示されている。この非対称性の意味することは、注意の移動がどのような形でモデル化されるべきものであるかなど、注意についてのさらに詳細な知識をなくして理解することは難しいと思われるが、興味深い特性であり実際の場面で重要性は非常に高いであろう。このような内容からもわかるように、本書は交通心理のみならず、注意や眼球運動などに興味のある読者にとっても有益な書であるし、また視覚研究一般に興味のある読者も興味深く読めると思う。

B5版 267頁 ハードカバー  
風間書房 平成8年3月31日発行  
定価 13,390 円 (incl)